OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	散る別れこそかなしかりけれ : 西行の新古今歌一首私解
Author(s)	三村, 晃功
Citation	語文. 1987, 48, p. 50-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68758
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

散る別れこそかなしかりけれ

——西行の新古今歌一首私解——

三村晃功

一　はじめに

文学作品が作者の手をひとたび離れると、作者の意図とは別個に独自にその歩を印し始めるのは自明のことだが、『去来抄』の次の記事はこの問題に触れた論述としてあまりにも有名である。

岩鼻やここにもひとり月の客　去来

先師上洛の時、去来曰く「洒堂はこの句を、月の猿、と申し侍れど、予は、客勝りなん、と申す。いかが侍るや」。先師曰く「猿とは何事ぞ。汝、この句をいかに思ひて作せるや」。去来曰く「明月に乗じ山野吟歩し侍るに、岩頭また一人の騒客を見付けたる」と申す。先師曰く「ここにもひとり月の客と、己と名乗り出づらんこそ、幾ばくの風流ならん。ただ自称の句となすべし。この句は我も珍重して、笈の小文に書き入れける」となん。予が趣向は、なほ、二、三等もくだり侍りなん。先師の意を以て見れば、少し狂者の感もあるにや。(1)

ここには、「岩鼻や……」の発句をめぐる、実作者去来の制作意図と、鑑賞者芭蕉の作品理解との落差が具体的に語られて興味深いが、作品鑑賞における師と弟子との深浅の度合は決定的で、両者の俳諧の本質追求の差異を歴然と表している。すなわち、去来が「ひとり明月に興じて逍遥していると、岩頭のあたりにもうひとり月にうかれ出た風流人がいた」(2)との意図でこの句を詠じたの対して、芭蕉は「みずからを岩頭にたたずむ騒客とし、冷たい月光を浴びる風狂の孤影に興じようとしている」(3)との解釈を示して、「みずからを対象化するのが風狂の精神であり、そこに俳諧的発想がある」(4)と鑑賞するのである。「月の客」を他称とする実作者去来の制作意図とは別個に、自称と解することによって、作者の意図した以上の文学的世界の構築を提示してみせた芭蕉の鑑賞眼はさすがと言うほかなく、風狂者芭蕉の面目躍如たる姿が彷彿としてくる。

ところで、このような事例は何も俳諧の領域に限ったことではなく、和歌の領域でも例外ではなく、作者の詠作意図を越えた解釈、鑑賞が可能な詠歌は少なからず存するのではなかろうか。『新古今集』収載の

題不知　　西行法師

(1)　ながむとて花にもいたくなれぬれば散る別れこそかなしかりけれ(5)（定・隆・雅）

の西行の詠歌は通常、久保田淳氏が『新古今和歌集全評釈第一巻』（昭和51・10、講談社）で、「物思いにふけりながら花をじっと見つめてきてその花にもひどく馴れ親しんだので、それが散ることによっていよいよ別れねばならないとなると、悲しく思われるなあ。」

と歌意を示されているように、恋人のようにいとおしんできた花が散ることによる別離（無常）を詠嘆的に悲しむ歌と解されている。が、私解によれば、第四・第五句の「散る別れこそかなしかりけれ」の措辞は、花が散ることによる別離によって生ずる悲しみの表出を意図した表現であることには相違なかろうが、それと同時に、「散る」主体を詠歌主体（作品世界における主体、この場合は「かなしかりけれ」と感じた主体。以下、この意味で言う）と考慮することによって、さらにこの歌の世界をより一層深め、詠歌主体の花に対する異常なまでの執着を表出させる表現ともなり得ると解釈、鑑賞されるのである。

本稿は、西行の(1)の詠歌をこのように解釈、鑑賞することによって、従来の読解よりも一歩西行歌の本質に迫り得るのではあるまいかという私解の提示であるが、大方の御叱正を賜りたいと思う。

二　「ながむとて」の語義

さて、『新古今集』巻第二・春歌下（一二六）に収載される西行の(1)の歌は、『山家集』上・春の「落花の歌あまたよみけるに」[6]の詞書、『西行上人集』春の「那智に籠たりし時、花のさかりに出ける人につけて遣ける」[7]の詞書のもとに、また、『山家心中集』の「花」[8]の題下に収載され、歌の本文異同は表記に漢字・仮名の違いこそあれ、まったく一致している。この三種の典拠から、(1)の詠が春の歌として詠作されていることは確実だが、必ずしも「落花」を主題としているとは言えず、『新古今集』では「題不知」の詞書が付されている点は注意しておく必要があろう。というのは、『新古今集』の(1)の歌の前後を見ると、直前の詠は、刑部卿範兼の

(2)　花散れば問ふ人まれになりはてていとひし風の音のみぞする　（一二五）

の歌で、「花落客稀といふことを」の詞書が、また、直後の詠は、越前の

(3)　山里の庭より外の道もがな花散りぬやと人もこそ問へ　（一二七）

の歌で、「山家落花をよみ侍りける」の詞書が付され、「落花」を主題とする一群のようでもあるけれども、『新古今集』春歌下の配列の仕方をみると、久保田氏が前掲書で、

桜（九九―一五〇）　曲水宴（一五一・一五二）　残花（一五三）
散る花（一五四―一五七）以下略

のごとく整理されているように、「散る桜」を主題とする歌群は(1)の歌の所属する歌群とはかなり後に配置されているからである。この点を押さえて、(1)の歌を検討するに、第一句の「ながむとて」の語義と、下句の「散る別れこそかなりかりけれ」の理解に問題点があることが判明する。

まず、第一句の「ながむとて」の語義の検討をすべく、先覚者の見解を調査するに、渡辺保氏が『西行山家集全注解』（昭和54・5再版、風間書房）で、

飽かず眺めようとして（大系注）物思ひにふけりながらぢっとみてゐて（全書注）深くものを思ひて、つくづくとうちまもり居るとて（塩井詳解）等があるが、「とて」の意味をはっきりさせるとして「ながむ」に稍ある程度の強調があるものと見て、この「ながむ」を客観的なものとして「ただながめる」として、「なれぬれば」（主観的に体験する）と対立した意味のあるものと考えたい。

と記述された見解に、峯村文人氏が『新古今和歌集』（日本古典文学全集26、昭和49・3、小学館）で注解された

しみじみとした思いで見つめるといっては。

の見解と、上条彰次氏が『新古今和歌集入門』（有斐閣新書、昭和53・1）で詳述された

普通、「ながめるといって、ながめながら」の意と取り、第二、三句へかかる三句切的句法と解されて来たが、「ながむとて人も頼めず月も出でじただ山の端の秋の夕暮」（『拾遺愚草』顕外・雑歌上）など定家歌にも見える用法に近く、「ながめるからといっても」という逆接的な意に取りたいのである。単に第二、三句へかかるのではなく、第二句以下の全体、むしろ結句「かなしかりけれ」へ重くかかる歌意の流れとなり、「ながむ」の語義も単に物思いに耽りながら見るの意ではなく、「桜の真実、さらに桜を通じての存在の実相を凝視する」という意味が現れてくることになる。

の見解を付加すれば、ほぼ網羅（カバー）されよう。このうち、上条氏の御説が独自の読解を展開して個性的（ユニーク）であるが、要するに、「ながむ」の語義にかかる差異が生ずるのは、花に対して詠歌主体が積極的な姿勢で関わっていると読解するか、消極的な姿勢で関与していると読解するかの相違であろう。

そこで、「ながむとて」の歌句の用例を探索すると、西行の詠以外に、

(4) しらぎくのかきほのはなをながむとてすみかならでもくらしつるかな（9）（在良集・終日対菊・一五）

(5) やまちかみしぐるるそらをながむとてはかなくけふもくらしつるかな（同・山路時雨・二一）

(6) きのふけふ雲のはたてをながむとてみもせぬ人の思ひやはしる（拾遺愚草・恋十五首・一三七二）

(7) ながむとて人もたのめず月もいでじただ山のはの秋の夕暮（拾遺愚草員外・夕・五三三）

のごとく四首拾うことができ、この菅原在良と藤原定家の各二首を検討するに、「ながむとて」の「とて」の用法に順接法と逆接法の相違があることが知られる。(4)・(5)の在良の用例が前者に、(6)・(7)の定家の用例が（7)についてはすでに上条氏の指摘がある）後者に相当するように、この「とて」の用法には詠歌者個人の表現の特性が顕著に認められるので、「ながむとて」の語義の規定も西行個人の「とて」の用法の吟味とともに行う必要が生じよう。したがって、この視点から、西行歌に認められる「とて」の用例を求めるに、(1)の歌以外に四一例を拾うことができ、（10）その用法を検討してみると、

(8) みさびゐて月もやどらぬにごりえにわれすまんとてかはづなくなり（山家集・かはづ・一八九）

(9) 庭の雪に跡つけじとてかへりなばとはぬ恨をかさぬべきかは（同・雪歌・五九二）

の用例に認められるように、全用例が順接法の用法である。（11）西行の「とて」の用法が順接法である点を踏まえて、次に、西行歌の「ながむ」の用法を検討するに、(1)の歌を除く「ながむ」の三九例の用例は、おおよそ四種類の用法に分類されよう。

まず、三九例の「ながむ」の用例のうち、

(10) いかで我このよのほかのおもひでにかぜをいとはで花をながめむ（山家集・落花の歌……・一一九）

(11) はりまがたなだのみ沖にこぎいでてあたりおもはぬ月をながめむ　（同・月・三四二）

(12) いかでわれ心の雲にちりすゑてみるかひありて月をながめむ　（同・一四九六）

の三首は、(10)・(12)が「いかで……む」の願望の語法、(11)が意志の助動詞「む」から、詠作者が対象（(10)は「花」、(11)・(12)は「月」）に積極的に関わろうとする姿勢がうかがわれ、この場合の「ながむ」は、(イ) 感情をこめて、あるものを見つめる。また、景色や美しいものなどを、鑑賞的な態度で見やる。

の語義がふさわしく、また、

(13) つれづれと軒のしづくをながめつつ日をのみくらすさみだれのころ　（山家集・五月雨・二四〇）

(14) ものおもひてながむるころの月の色にいかばかりなるあはれそふらむ　（同・七一二）

の二首は、(13)が「つれづれと」、(14)が「ものおもひて」の措辞から、「ながむ」は、(ロ) 物思いなどに沈みながら、ある一点や戸外などをぼんやり見る。

の語義がふさわしく、また、

(15) くもにまがふ花の下にてながむればおぼろに月は見ゆるなりけり　（山家集・花のしたにて月をみて……・一〇一）

(16) あだにちるこずゑの花をながむれば庭にはきえぬゆきぞつもれる（同・しらかはの花庭おもしろかりけるをみて・一四八）

(17) 山端にかくるる月をながむればわれも心のにしにいるかな　（同・見月思西と云ふ事を・九四二）

の三首は、「ながむ」の語義が各々詞書の圏点を付した措辞(15)・(16)は「見て」、(17)は「見」に対応している点から、「ながむ」は、(ハ) 客観的に眺める。

の語義がふさわしいと判断されようが、これらの八例を除く残りの三一例は、

(18) ながむれば袖にも露ぞこぼれけるそとものをだの秋の夕ぐれ　（山家集・田家秋夕・五〇八）

(19) こひしさやおもひよわるとながむればいとど心をくたす月影　（同・七〇九）

の用法に代表されるような用例(12)で、特定の語義に限定するのが困難な用法であるが、強いて語義を規定するとすれば、この場合の「ながむ」は、

(ニ) ぼんやりと見やりながら、物思いにふける。なにもしないで、ただぼんやりと見ている。

くらいの語義が相当するであろうか。西行歌に認められる「ながむ」の語義は、したがって、それほど固定的、限定的に使用されていず、かなり幅をもって用いられている場合が圧倒的多数を占めていると言うことができ、その点、鑑賞する側の読解、鑑賞能力に応じて対応できる余裕を感じさせる用法となっている。

となると、当面の(1)の歌の「ながむ」の語義も、(イ)・(ロ)・(ハ)の語義になる場合のような諸条件を具備していない点から、(ニ)のごとき語義に解するのが妥当なのではあるまいか。つまり、「ながむとて」の一首のなかでの役割は、直接的には第二、第三句の「花にもいたくなりぬれば」の原因、理由として作用するところにあるわけだが、この第一句の内容にあまりに明確な意味を限定してしまうよりは、

むしろ漠然とした意味で読解する方が、一首の世界をより深く効果的にすると判断されるので、(1)の歌の「ながむとて」の語義は、(二)のごとく解することによって、花に積極的な姿勢で関与してきたわけではないけれども、毎年毎年、花をぼんやりと見やりながら、物思いにふける行為がたびかさなると、直接には結びつくはずのない花と「ながむ」主体との関係が、いつの間にか「いたくなれぬれば」と言うほどに親密度を増す結果になったという意外性が生じてき、味わいが深まるのではあるまいか。

要するに、西行の(1)の歌に認められる「ながむとて」の用法は、王朝以来の伝統的な用法の域をさほど出ていない用法と言えようか。

三　「散る別れこそかなしかりけれ」の再検討

ところで、(1)の歌の第二、第三句の「花にもいたくなれぬれば」の措辞については、古注の間でも問題がないではないが、久保田氏が『西行山家集入門』（有斐閣新書、昭和53・8）で、「花を恋人のようにいとおしんでいる作者の心がよく出ている。『なれ』という動詞は皮膚感覚に訴えるような感じを持った言葉である。」と注解されたとおりなので、ここでは省略に従い、下句の「散る別れこそかなしかりけれ」の措辞の検討に移りたい。

まず、諸注を調査するに、そのすべてが峯村氏が前掲書の頭注に「花が散り去るという別れ。散っていくことによる、花との別れ」と記されているのと同趣の内容であるので、はたしてそれでいいのか否かを検討すべく、「散る別れ」なる用例を求めると、西行没後の歌人の歌ではあるが、

(20) さく花のちるわかれにはあはじとてまだしき程を尋ねてぞみる(13)

（新葉集・祥子内親王・一〇二六）

(21) ちるわかれ思ひしりつゝ恋にたに心をそめぬこゝろこそあれ(14)

（年代和歌抄・国永・一九四三）

(22) 散わかれありとはしれとやま里の花にも馴す春そくれ行(15)

（清渚集・一〇七）

の三首を拾うことができ、(20)は「さく花の」、(22)は「春そくれ行」の措辞、(21)は「花によせて世を観する心を」の詞書から、「散る別れ」の用法はいずれも(1)の歌の場合と同様であることが知られる。ことに、(21)・(22)の歌は西行の(1)の歌を下敷にした翻案であることが一目瞭然で、「散る別れ」の措辞をこれらの歌人が諸注のように享受していた背景が知られる点で、現在の諸注の内容の蓋然性の高さを裏付けよう。

ところで、『山家集』に「別れ」なる用例を求めるに、(1)の歌以外に一四例を拾うことができるが、そのうち、「散る別れ」のごとき「別れ」に連体形が接続する語構成の用例は、次の五例である。

(23) あふと見ることをかぎれる夢ぢにてさむる別のなからましかば

（夢会恋・六三六）

(24) おもかげのわすらるまじき別れかな名残を人の月にとどめて

（月によする恋・六八四）

(25) さまざまにあはれおほかるわかれかな心を君がやどにとどめて

（詞書省略・一〇〇九）

(26) さだめなしいくとせ君になれなれしわかれをけふはおもふならむ(16)

（同・一一七八）

(27) さりともと猶あふことをたのむかなしでの山ぢをこえぬわかれは

（同・一二二九）

この五例の「別れ」の主体を検討するに、(24)は「おもかげの」、(25)は

「心を君がやどにとどめて」の措辞、(26)は「としひさしくあひたのみける同行（注、西住）にはなれて、とほく修業してかへらずもやと思ひける、なにとなくあはれにて」、(27)は「とほく修業する事ありけるに、菩提院のさきの斎宮にまゐりたりけるに、人々わかれの歌つかうまつりけるに」の詞書から、その主体は各々詠歌主体であることは明白であろう。ところが、(23)の場合は多少趣が異なり、この場合だと、「さむる別」の解釈が、(A)「夢が覚めるという別れ。覚めることによる、夢との別れ」、(B)「夢から覚めて恋人と別れるということ」の二通りにわかれ、その主体も夢と詠歌主体の両方が候補にのぼろう。その点、(23)の「さむる別」なる措辞は当面の(1)の歌の「散る別れ」とほとんど同種の語構成と判断してよく、参考になる。要するに、(23)～(27)の歌に認められる「別れ」に連体形で接続する語構成の用例の主体を吟味すると、(23)の用例のように二種類の主体が想定される場合もあるが、そのほとんどの場合は詠歌主体である。となると、(1)の歌の「散る別れ」の主体も、(23)の用例からも明白なように、「花」を主体とする見解と同時に、詠歌主体を想定する可能性も多分に生じてくると言い得るであろう。

ちなみに、「かなしかりけれ」の語義を明らめるべく、『山家集』に「かなし」の用例を求めると、(1)の歌の用例を除くと、二一例見出し得る。[17] その全用例を吟味するに、内親や男女間の愛情を表す「愛し」の語が適合する場合は皆無で、すべて死や別離に伴う悲哀の情を表す「悲し・哀し」の意味で使用されていることが知られる。その際、「かなし」の対象はというと、「こがらしの風」（五三二）・「しぐるる音」（五三八）・「秋」（三二一）・「野べになく虫」（四九二）・「鐘の音」（一一六七）など多種多様だが、これらの用例では、概して、しみじみとした悲哀の情の表出を意味している場合が多い。一方、人の死を「かなし」の対象とする

(28) みがかれし玉のうてなを露ふかき野へにうつして見るぞかなしき（詞書省略・八五二）

(29) みちかはるみゆきかなしきこよひかなかぎりのたびと見るにつけても（同・八五四）

のごとき用例では、「かなし」は対象に対する悲痛な愛惜の情を表出する意味で使用されている。ただ、(28)・(29)の用例では、他者（(28)・(29)とも鳥羽院の死）が「かなし」の対象となっている点が(1)の歌の「かなし」の語義の規定に多少の適切さを欠く用法と言わねばなるまいが、しかし、『山家集』には、

(30) いづくにかねぶりねぶりて倒れふさむとおもふかなしきみちしばのつゆ（無常歌……九一六）

(31) とほちさすひだのおもてにひくしほにしづむ心ぞかなしかりける（題不知・一一一二）

(32) ことのはのなさけたえたる折節にありあふ身こそかなしかりけれ（詞書省略・一三一七）

のごとく詠歌主体が「かなし」の対象になる用例も数例あり、(31)は意味不明だが、(30)は無明長夜の眠りを重ねる自己を、(32)は当時の歌壇の中心人物であった崇徳院が保元の乱で敗北し、讃岐に遷御なさったために、和歌の道が衰退してしまう時節に生き長らえて遭遇するわが身の不運を、各々詠歌主体が悲歎する意味で使用されている。したがって、「かなし」と感ずる対象が詠歌主体となる場合には、「かなし」の語義はかように自己のそうなる運命を悲歎する意味に使用されている『山家集』の用例検討から、(1)の歌の「かなし」の

語義もそのようになるであろう。もっとも、「散る別れ」の主体が詠歌主体ではなく、「花」であるとすれば、その際には、㉘・㉙の用例に認められたように、対象に対する悲痛な愛惜の情を表出する意味に解するのが適切であることは言うまでもない。となると、(1)の歌の下句の歌意は、

これまでいつの間にか馴れ親しんできた花が散って眼前から姿を消してしまうのは、とても愛惜の念に堪えないが、それと同時に、そのように馴れ親しんできた花に対して、花が散るように、自分が死ぬことによって、二度と花に逢えなくなるということは、とても堪え切れないほどに悲しい運命であることだなあ。

というくらいになるであろうか。

なお、(1)の歌の下句に関して、従来の見解のうえに、「散る別れ」の主体を詠歌主体ともとれると考慮する私解の可能性と蓋然性について整理しておこう。その理由の第一は、「花」の「散る別れ」が「かなしかりけれ」だとかりにすると、極論すれば、花は来年の春を待てば再会し得る存在だから、そうなると、第一句の「かなしかりけれ」の措辞が一首の世界のなかであまりに軽い色調（ニュアンス）しかもたず、しかも第二、第三句の「花にもいたくなれぬれば」の措辞は一回限りの春の期間に対して表明された認識ではなく、幾度かの春を経過した後での素直な気持ちを叙述した表現と解されるので、「散る別れ」を詠歌主体と解する方が「かなしかりけれ」と詠嘆する主体の悲愴感がよりいっそう強まるのではなかろうか。

その第二は、(1)の歌の上句と下句の接続関係をみるに、上句の条件節における主体と、下句の主節における主体を同一と解した方が、一首の表現世界により一層の緊張感を持たせ、有機的に均整のとれた全体像を構築させ得ると考えるからである。一般に和歌の上句と下句との接続関係は必ずしも同一主体になるとは限らないが、この歌の場合、「いたくなれぬれば」の主体が詠歌主体であることは疑う余地もないから、「いたくなれぬ」る対象が「別れ」る主体となると考えるよりも、「いたくなれぬ」る主体が「別れ」る主体となると考える方が、「かなしかりけれ」の悲劇が強まるとともに、語構成の点からも自然な在り方になると言えるのではあるまいか。

その第三は、西行の一生を彼の和歌を中心とした挿話や説話で綴った『西行物語』の伝本のなかで、文明本系統の祖本と推定される『西行物語絵巻・詞書』（萬野家本）の第三段の詞書の一部に、

たづね入たるかひありて、さきみだれたる花のもとにてみれば、さきちるながめおもしろさに、このやまにて命のつきなんまでと思て、

ながむとてはなにもいたくなれぬればちるわかれこそかなしかりけれ

吉野山やがていでじとおもふ身をはなちりなばと人やまつらん(18)

という記事があり、(1)の歌の成立事情に言及して、「さきちるながめおもしろさに、このやまにて命のつきなんまでと思て」と叙述していることである。この部分は文明本『西行物語』では、「さきちるながめのおもしろさに、この山にて命きえばやとおもひて(19)」と多少の異同が認められるが、鎌倉中期の制作と目される『西行物語絵巻・詞書』にこのような記述が見出されるのは実に、(1)の歌を理解するうえで貴重と言わねばなるまい。というのは、「桜が咲き乱れている木の下で見ると、その桜の咲き散る眺望があまりに興趣深いために、この吉野山で命が尽きるまで（桜と一緒にいたい）と思っ

て」なる、ここに引用した萬野家本『西行物語絵巻・詞書』の地の文は、(1)の歌の歌意とはかなり趣が異なると言わねばなるまいが、(1)の歌の「花にもいたくなれぬれば」の措辞が『西行物語絵巻・詞書』の「さきちるながめおもしろさに」の措辞に、同じく(1)の歌の「散る別れ」の措辞が『西行物語絵巻・詞書』の「命のつきなん」(文明本では「命きえばや」)の措辞にそれぞれ対応している点で、まことに示唆的であるからである。つまり、『西行物語絵巻・詞書』の文章展開では、花の咲き散る情趣が趣深いので、命が尽きるまで花とともにいて賞美したいと言うわけだが、翻って、この視点から(1)の歌の「散る別れ」の意味を考慮すると、「散る別れ」の主体を「花」とみると矛盾をきたすが、逆に、それを詠歌主体とみなすならば、自分が死んで花に逢えなくなることは、まさに「かなしかりけれ」ということで、首尾一貫するのである。『西行物語絵巻・詞書』はもちろん西行の自作ではなく、かかる読解、鑑賞が適切であるか否か、問題もあろうかと思うが、しかし、鎌倉中期ごろにかかる読解を試みた作家がいたということは、「散る別れ」の主体に詠歌主体の可能性を想定する筆者の私解を、ある程度妥当なものと判断する証拠の一つにはなり得るであろう。

なお、『新古今集』の撰者がこの(1)の歌の詞書を、「落花」としないで「題不知」としている背景も、このように考慮すれば納得がいくであろう。

四　まとめ

以上、『新古今集』春歌下に収載される西行の(1)の歌について、縷々臆測を重ねてきたが、はたして、去来の発句に対する芭蕉の鑑賞のごとき優れた見解の提示になり得ているか否か、はなはだ心もとないと告白しなければなるまい。が、ここで、これまで論述してきた要点を整理すれば、次のごとくなろう。

(1)　西行の(1)の歌の第一句「ながむとて」の語義は、「とて」を順接法と解して、「花に積極的に関与しているわけではないが、毎年毎年、花をぼんやりと見るともなく見やりながら、物思いにふけってきて」くらいになるであろう。

(2)　第四句のなかの「散る別れ」の主体は、「花」とする従来の見解に加えて、詠歌主体と考慮する可能性のあること。

(3)　第五句のなかの「かなし」の語義は、「散る別れ」の主体を「花」とみなす場合は、「花」に対する悲痛な愛惜の情を表出する意となり、「散る別れ」の主体を詠歌主体とみなす場合は、自己のそうなる運命を悲歎する意となろう。

(4)　「散る別れ」の主体を詠歌主体とみなす有力な根拠は、『西行物語絵巻・詞書』の第三段の詞書の一節にある。

(5)　西行の(1)の歌の歌意は、「花に積極的に関与しているわけではないが、毎年毎年、花をぼんやりとみるともなくみやりながら、物思いにふけってきて、その花にもひどく馴れ親しんだので、その花が散って眼前から姿を消してしまうのは、とても愛惜の念に堪えないが、それと同時に、そのように馴れ親しんできた花に対して、花が散るように、自分が死ぬことによって二度と花に逢えなくなるということは、とても堪え切れないほどに悲しい運命であることだなあ。」ということになろうか。

なお、本稿は、西行の和歌一首の解釈、鑑賞面に重点をおいて考察を加えたので、西行の思想面などからの言及はできるだけ避けるように努めた。その点、問題が残ろうが、ここでは、あくまで和歌

の解釈法の一私解として、御叱正を賜りたく思う。

〈注〉

(1)『連歌論集　能楽論集　俳諧集』（日本古典文学全集51、昭和48・7、小学館）所収の「去来抄」による。

(2)『近世俳句俳文集』（日本古典文学全集42、昭和47・2、小学館）所収の「近世俳句集」の評釈。

(3)注1の頭注。

(4)注3に同じ。

(5)『新古今和歌集』（日本古典全書、昭和46・7、朝日新聞社）所収の「山家集」による。以下、『山家集』の本文は本書による。

(6)久保田淳氏編『西行全集』（昭和57・5、日本古典文学会）所収の「西行上人集」（李花亭文庫本）による。

(7)久保田淳氏編『西行全集』（昭和57・5、日本古典文学会）所収の「山家心中集」（伝西行自筆本）による。

(8)久保田淳氏編『西行全集』（昭和57・5、日本古典文学会）所収の『新編国歌大観第三巻』（昭和60・5、角川書店）所収の「在良集」（書陵部本）による。なお、(6)・(7)の『拾遺愚草』・『拾遺愚草員外』収載歌も、本書所収の当該歌集による。

(9)『新編国歌大観第一巻』（昭和60・4、角川書店）所収の「新葉和歌集」（内閣文庫本）による。

(10)臼田昭吾氏『西行法師全歌集総索引』（昭和53・7、笠間書院）の恩恵に与った。

(11)その他の用例は、注6の歌番号で示せば、『山家集』の四八・一四四・一八九・二六七・三八〇・四八六・五〇〇・六七三・六八五・六九一・七〇四・七二一・七二三・七四八・七六五・七六八・八三四・九八四・九九四・一〇三四・一〇九一・一一三一・一二〇一・一二七三・一二八二・一三四〇・一三四四・一三六七・一三七六・一四〇二・一四四六・一四五六・一四七七・一五一一、「西行和歌拾遺」の一九七八・二〇〇五・二〇七七・二一八三・二二八〇のとおり。

(12)その他の用例は『山家集』の一〇六・一〇八・一一一・三八五・三八八・三九二・三九四・三九五・四〇七・四一五・四三九・四四八・五〇八・六一九・六八七・七〇九・七一一・八四九・九七二・一一二七・一一三二・一一四二・一二二二・一四〇五・一四九七・一四九九・一五〇〇・一五〇三・一五五一・一五九一・一六四一のとおり。

(13)『新編国歌大観第一巻』（昭和58・2、角川書店）所収の「新葉和歌集」（内閣文庫本）による。

(14)『私家集大成7』（昭和51・12、明治書院）所収の「年代和歌抄」（大阪市大本）による。

(15)『近世和歌撰集集成地下篇』（昭和60・4、明治書院）所収の「清渚集」（神宮文庫本）による。

(16)この歌の第三句は諸本「なれなれて」とあるが、それだと連体形接続の語構成とならないので、この用例から除外しなければならない。

(17)『山家集』の歌番号で示せば、三二一・四七四・四七六・四九二・五三二・五三八・七〇五・八三一・八四九・八五二・八五四・八六一・八六三・九一六・九七九・九八〇・一一一一・一一一八・一一六七・一二二一・一三一七のとおり。

(18)久保田淳氏編『西行全集』（昭和57・5、日本古典文学会）所収の「西行物語・詞書」（萬野家本）による。

(19)久保田淳氏編『西行全集』（昭和57・5、日本古典文学会）所収の「西行物語」（文明本）による。